

消費される女の子

綾乃

わたしはお兄ちゃんが、すき。

わたし、平野紅子は、兄が好きだ。血も繋がった、実のお兄ちゃん。

お兄ちゃん、平野恭一は、二十二歳。高校を卒業して、パパの会社で働いたり働かなかったりしてる。わたしのことを柔らかく、こーこ、って呼ぶ。その声が好きで、性格って声に出るんだなあって思う。

わたしはといえば、まだ高校で、バイトくらいしか仕事もできないし、声は小さくて、ママには、神経にさわる、って言われる。声も性格も。たぶん、ママはわたしのことが嫌いなんだろう。

朝ごはんのトーストを食べ終わり、テーブルに散乱したパン屑を、ママに舌打ちされる前に(いや、ママでもさすがに舌打ちはしないか.....)拭き取って、歯を磨く。いっつ、と前歯を出した顔はママ似。

パパは、ママに似てかわいい、と言ってくれるけど、パパに似たかった。たぶん、ママはわたしがママに似ているから嫌いなんだろうって。

わたしは階段を上がり、お兄ちゃんの部屋の前にたつ。

「おーにーいちゃん」

とんとん、とドアをノックして、返事を待たず開ける。今日は休日。お兄ちゃんも休日。

「おはよう、お兄ちゃん、朝だよ」

「うん.....、まだ朝だろ.....」

「もう朝」

「まだ朝.....」

こういうのを「おしもんどう」って言うんだらうか。

「今日は服、買ってくれる約束！」

「午後じゃダメか.....」

「ダメ！ ラステルでお昼食べる」

「たかるよなあ.....」

仕方ない、ともぞもぞと布団から出てきて、眼鏡をかける。

「お兄ちゃん、眼鏡ダメ」

「ええー？」

「ダサイから、ダメ」

ほんとは、お兄ちゃんは眼鏡がものすごく似合う。かけてないとき優しそうに見える顔に眼鏡を足すと、頭がよくて、しっかりした男の人に見える。

実際は天然ボケで、とんちんかんで、頭はいいけど、弱々しい、女々しい男の人なのだ。

そんなところも、好き。

「コンタクトにして」

「はいはい。.....こーこ」

「はい！」

お兄ちゃんに名前を呼ばれてわたし、にっこり。

「着替えるけど、何着たらいい？」

「ブイネックにカーディガン！」

「.....ヒモスタイル、好きだなあ.....こーこは」

将来が心配だ、と呟かれるけれども、わたしがお兄ちゃん以外の男の人にひっかかる危険性はない。

お兄ちゃんが着替えをする間、部屋からポーチを持って階下に降りる。

洗面所で、それを開け、ビューラーと透明マスカラ、ティントタイプのリップグロスを取り出す。

まつげを上げて、マスカラでキープして、グロスを付けて少し待つ。

「こーこ、顔洗わせて」

さっさと着替えたい「ヒモスタイル」のお兄ちゃんに鏡の前を明け渡す。

グロスが色づいてきたので、ティッシュでおさえる。

「口紅すると女の子らしくなるな」

顔を拭きながらお兄ちゃんはわたしを見て言う。嬉しくてにこにこ.....(ニヤニヤ.....?)しながら、

「お兄ちゃん、口紅じゃなくてグロスだよ」

と照れ隠し。

「どこに買いに行くんだ？」

「よこはま！」

うちから横浜駅へは電車で十五分。ちなみに駅まで歩いて二十分。.....遠い。でも今日はお兄ちゃんと一緒に。歩くのも、電車に揺られるのも、楽しみ。

お兄ちゃんがトーストをまったり食べるのをじりじりともどかしく思いながら待ち、歯を磨く間に靴を出す。ティーストラップの、ちょっと大人っぽい、赤いエナメルのパンプス。

ストラップを留めたところで鞆を持って現れたヒモ系お兄ちゃんと一緒に家を出る。

「行ってきます」

お兄ちゃんはそう声をかけ、ママが「行ってらっしゃい」と返す。わたしは無言で、ドアを開けた。

「こーこ、行ってきますくらい言いなさい」

歩きながらお兄ちゃんがわたしを叱る。

「だって、ママ、わたしが行ってきます言っても無視するもん」

「そんなことはないだろう」

「するの。毎朝」

「.....母さんと話しておくよ」

無駄なんだけどなあ。無駄なんだけど、お兄ちゃんがわたしを気にかけてくれているから、うれしい。

コツコツコツ、と、パンプスを鳴らして歩く音が、大人みたいでうれしく、気持ちと体が軽く感じる。

ヒールは、四センチ。わたしは身長百六十二センチ、お兄ちゃんが百七十一センチ。ヒールを履くと、五センチ差。いつもより顔が近い高さにある。

二人で話しながら歩き、ちょうど、駅のホームに着いたところで電車が来た。

笑いながら「お兄ちゃんがあと少し遅く起きてたら間に合わなかったね」と呟くと、「別にもう一本後の電車でも……」と返ってくる。

電車に乗り込み、ドア近くの手すりに掴まる。平日より空いた車内は、いつもよりカラフル。ああ、そうか、スーツと制服が少ないんだ。

お兄ちゃんは黒いインナーとカーディガン、わたしは黒のワンピースに赤いパンプス。休日だけど、平日よりカラー。

近くに座っている女の子が、お兄ちゃんをちらちら見ているので、わたしはつい、お兄ちゃんの袖長めのカーディガンを摘まむ。

「袖伸びるだろ」

「元から伸びたような袖口だもん」

女の子は残念そうにふいと視線を手元のスマホに落とした。

わたし、優越感。この人はわたしのもの。わたしのお兄ちゃん、わたしの男の人。

「お兄ちゃん、このお店！」

地下街の行き着け(とは言っても、お金が足りないから見るだけのことが多いんだけど)のお店に、お兄ちゃんの腕を引いて入る。

「裾が透けてるワンピース欲しいの」

「透けてる……」

「あ、セクシーなのじゃないよ。おしゃれなの」

女の子の服にはうといお兄ちゃん。こんなの、と、白地にうすい青の花柄のワンピースを見せる。

「最近の服はフリルが多いな」

「あ、お兄ちゃん鋭い、フリル流行り」

「でも高校生ならもっとはっきりした色の方がいいんじゃないか」

わかってない。お兄ちゃんとの歳の差、五歳。それを埋めたいがためのパンプス(身長差も埋まっちゃうけど)。

「んー、こっちもかわいい」

黄色い、ふんわりしたワンピース。フリルは付いていないけど、綺麗な色。

「試着したら？」

「うん」

ワンピースを持って店員に試着したいと告げ、試着室で、着ていた黒いワンピースを脱ぐ。

家では、当たり前だけど。

お兄ちゃんのこんなに近くで、下着姿になっている。暫く鏡を見つめる。薄っぺらくて、胸のない体。

「こーこ、着れた？」

「あっ、もうちょっと」

慌てて青い方のワンピースを着て、試着室のカーテンを開ける。

「どうかな」

「ああ、かわいいかわいい」

笑いながら頷かれ、頬が火照るように感じる。店員も、かわいいです、お似合いですね、と頷く。

。

「もう一着のほうも着てみるね」

再びカーテンを閉め、着替える。

「どう？」

「かわいいな。両方買う？」

「いいのっ？」

つい、胸の前で両手を組んでから、

「.....やっぱり、片方でいい」

「いいの？ 兄ちゃん、それくらいなら買えるけど」

「うん、お兄ちゃんがいいと思う方にする」

「俺？」

「うん、ね、どっち？」

お兄ちゃんは腕を組んで悩み、

「.....黄色かな」

「決定」

服を店員に渡し、お兄ちゃんと一緒にレジへ。わたしはポイントカードだけ出し、お兄ちゃんに買ってもらう。

「ありがとうお兄ちゃん」

「どういたしまして」

お兄ちゃんを選んでくれた(二択だけど)ワンピース。

あ、夏の家族旅行で着よう。お兄ちゃんと二人で、写真撮ってもらおう。お兄ちゃんは、「ヒモスタイル」で。

みんなは、知らなくていいの。

服を持ってお店を出て、お昼ご飯を食べに、ラステルへ。

「パスタにするか、リゾットにするか……」

「半分こする？」

「する、する」

ナスとトマトのミートソーススパゲティときのこのリゾットを、セットメニューで注文する。

アイ스티ーを飲みながら、お兄ちゃんをちら見。ラステルのポイントカードをお財布から探している。

「お兄ちゃんポイントカード持ちすぎだよ」

「こーこが自分で持たないから……」

「さっきのお店の人は自分で持ってるもん」

「あ、あったあった。……こーこ、フローズンケーキ百円になるけど。ポイント貯まってる」

「えっ、食べ……」

食べたい、と言いかけたところで、

「……パスタにケーキは太る……」

「こーこはガリガリだから太ってもいいと思うよ」

「ほんと？」

「なんだったら、ケーキも半分ずつ食べよう」

「うん！」

届いたパスタとリゾットを、取り皿に取って食べる。おいしい。パスタのチーズが、フォークから伸びる。

「おいしいね」

「ラステル好きだな」

「うん」

リゾットも美味しかった。食べ終わって、お皿が下げられて、フローズンケーキが届く。

ケーキをテーブルに置いても去らない店員を訝しく思い、見つめていた目をケーキから店員に移す。

「……平野？」

わたしを見ていたのは、同じクラスの男子だった。

「あ、……」

「平野だ。……デート？」

「……」

「……こんにちは。こーこの兄です」

「あ、こんにちは……お兄さん」

見るな。

わたしはうつ向いて歯を食いしばった。

「平野、いつもと違うな。眼鏡もしてないし、三つ編みじゃないし、……そういう服似合うんだな」

見るな。

お兄ちゃんの前で、わたしに話し掛けるな。

「……あ、邪魔したな。じゃ、ごゆっくり」

去っていく。わたしは顔を上げられなかった。

「……クラスの子？」

「……うん」

「……ここ、ケーキ食べよう」

「うん」

名前も覚えていない、クラスメイト。見られたくなかった。わたしが、減る。消費される。お兄ちゃん以外に。

ケーキを食べて、お店を出る。

二度とこのラステルには来ない。

次の日、学校に行くと、男子がいつものように固まって騒いでいた。

いつもならいくつかのグループに別れているけれど、今日はみんな一つに固まっていた。

……嫌な予感が、した。そして、当たった。

「平野！」

びくりと体をすくませる。

「眼鏡、取って」

名前も知らない、話したこともない男子が、近寄ってくる。

来ないで。

近寄らないで。

見るな。

「何言ってるの、海原」

富田京子に海原、と呼ばれた男子は、わたしを指差す。

「三木村が昨日、眼鏡してない平野見たんだって。めっちゃかわいかったって」

富田は少し苛立ったように眉根を寄せた。

「平野さん」

海原以上に近寄ってきた富田は、わたしに手を伸ばした。眼鏡をとられ、俯こうとした顎を捕まれる。ぐいと正面を向かせられ、目が合うと、富田は見開く。

「うっわ、すっげーかわいい！」

海原が叫ぶ。他の男子も集まってきて、そして、他の女子も、寄ってくる。

その手によって、三つ編みがほどかれ、わたしは、

わたしは、

わたしは消費される。

「さわらないで」

「神経にさわる」小さな声で、叫ぶ。

「見ないで」

「かわいい」顔を歪ませる。

「どうして？ こんなにかわいい！」

誰だか分からない女子生徒が言う。

「かわいい」「すごくかわいい」「もったいない」——見るな。

お兄ちゃん以外にかわいいなんて思われたくない。

お兄ちゃん以外、わたしを知らなくていいの。

あなたが愛する、唯一の。

自分の部屋にいた。

気絶などしていたのではないようだった。

「……どうやって帰ってきたんだろ」

時刻は四時、数分前。授業を受けて帰ってきたのか、あのまま飛び出して帰ってきて、いま、気がついたのか。わたしは自分の部屋の真ん中に、ばかみたいに立っていた。

「紅子？ お母さん、買い物に……」

ノックもせずドアを開けたママと目が合う。

「どうしたの？ そんなところに立って」

「……ぼーっと、してた」

「……そう？」

ママは納得してはいないような顔で、ドアを閉じた。

「紅子！」

ママは、ドアを閉じて五分も経たないうちに、再び部屋に飛び込んできた。

「担任の先生と、女の子と男の子、来て、紅子が、ああもう、来なさい」

腕を強く掴まれ、部屋から出る。

玄関には、担任と、海原、富田がいた。

……海原は頬を腫らし、富田は口の端に絆創膏を貼っていた。

「平野」

担任教師が厳しい口調で呼ぶ。

「あの、先生、まさか、紅子が」

「……朝のホームルーム前に喧嘩をして、帰り際に二人を……殴って、帰ったそうです」

「殴っ、て……！？」

ママはヒステリックになくなって、先生も興奮して、海原と富田は俯きながらもわたしを睨んでいた。

ぼーっと、話を聞かず、ただ、反省した様子を見せていたら、担任は、

「平野、謝ろう。な？ 海原と富田はふざけてただけなんだ」

と、わたしの肩を叩いた。

「―――触るな」

え、と担任の口から音が漏れる。

「触るな！ わたしは、わたしは」

「落ち着いて、紅子、ねえ」

「―――平野が落ち着いたら、謝りなさい、海原、富田、行こう」

落ち着いたら。

落ち着くわけ、ない。だって、わたしは、興奮してもヒステリーで叫んでいるわけでもないんだから。

いつも大人しい、優等生の平野紅子が、我を失っているんてわけじゃ、ないんだから。

「紅子……」

「どうしたの」「何をされたの」「あなたも辛かったんでしょ」そんな言葉を期待してた、わけじゃ、なかった、けど、

「あなた、悪いことして、謝らないのはよくないわ」「お兄ちゃんは手がかからなかったのに」「——ほんとに、どうしようもない子」

布団にくるまって、小さくなって、泣いた。

消費されることも、殴ってしまったことも、殴ってしまったのを覚えていないことも、わたしが全て悪いとされたことも、どうでもよかった。

ママがわたしを、どうしようもない、悪い子だと思っていること。

それが辛かった。

「……こーこ……？」

柔らかい声。

「お兄ちゃん」

「大丈夫か？」

「……うん」

お兄ちゃんは、わたしのベッドの脇に座って、頭を撫でてくれた。

「お兄ちゃん」

「ん？」

「わたし、お兄ちゃんが好き」

「お兄ちゃんも、こーこが好きだよ」

「わたし、お兄ちゃんになりたい。お兄ちゃんになりたいかった」

憧れ。いつしか、恋慕に変わって。

いや、最初から今まで、憧れ、お兄ちゃんみたいになりたい、お兄ちゃんになりたい。それだけだったかもしれない。

憎かった。羨ましかった。でも、今は恋だった。

「わたしはわたしがきらい」「わたしに似た娘がきらい」「わたしのようになってほしくない」「わたしのようにならざるべき」ママの、十年前の口癖。

ママ、覚えているんだよ。あなたの、憎しみ。

ああ、——お兄ちゃんと、不幸せになりたい。

お兄ちゃんになりたいかった。

ママに疎まれる女の子じゃなくて。

ママ、愛して。

お兄ちゃんに抱きつき、その首筋に噛みついた。獣のように、吸血鬼のように。

お兄ちゃんは痛みを堪えてくれる。

お兄ちゃんはわたしに消費される。

お兄ちゃんに消費されたい。

お兄ちゃんになりたい。

男の子になりたい。

でも、ほんとは。

ママが愛する、唯一の、女の子に。なりたい。